Essbase Studio Readme リリース11.1.2.4.000

リリース 11.1.2.4.000

製作著作 © 2015

目次

目的 1
このリリースでの新機能 1
インストール情報 1
サポートされているプラットフォーム 2
サポートされている言語 2
サポートされているこのリリースへのパス 2
このリリースで修正された問題 3
既知の問題 4
ヒントとトラブルシューティング 9
ドキュメントの更新事項 14

目的

このドキュメントには、このリリースのOracle Essbase Studioに関する重要な最新情報が記載されています。Oracle Enterprise Performance Management Systemをインストールする前に、このReadmeを十分に確認してください。

このリリースでの新機能

Oracle Essbase Studio新機能ガイドを参照してください。このリリースでのインストール、アーキテクチャおよびデプロイメントの変更に関係のある新機能については、*Oracle Enterprise Performance Management System Readme*のこのリリースでの新機能に関する項を参照してください。

このリリースでのインストール、アーキテクチャおよびデプロイメントの変更に関係のある新機能については、*Oracle Enterprise Performance Management System Readme*のこのリリースでの新機能に関する項を参照してください。

https://support.oracle.com/oip/faces/secure/km/DocumentDisplay.jspx?id=1092114.1

インストール情報

EPM System製品のインストールに関する最新情報は、*Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成Readme*を参照してください。EPM System製品をインストールする前に、ここに記載された情報をよくお読みください。

Oracle Smart View for OfficeはOracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installerとともにインストールされなくなりました。Smart Viewの最新リリースをダウンロードしてインストールするには、http://www.oracle.com/technetwork/middleware/smart-view-for-office/overview/index.htmlを参照してください。

サポートされているプラットフォーム

EPM System製品のシステム要件およびサポートされているプラットフォームに関する情報は、*Oracle Enterprise Performance Management Systemの動作保証マトリックス*にスプレッドシート形式で提供されます。このマトリックスは、Oracle Technology Network (OTN)の「Oracle Fusion Middleware Supported System Configurations」ページに掲載されています:

http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html

サポートされている言語

EPM System製品のサポートされている言語に関する情報は、*Oracle Enterprise Performance Management Systemの動作保証マトリックス*の「Translation Support」タブでスプレッドシート形式で提供されています。このマトリックスは、OTNの「Oracle Fusion Middleware Supported System Configurations」ページに掲載されています:

http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html

サポートされているこのリリースへのパス

EPM Systemは、次のリリースからリリース11.1.2.4にアップグレードできます:

注意: アップグレードの手順は、*『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』*のEPM System製品のアップグレードに関する項を参照してください。

表1 サポートされているこのリリースへのパス

アップグレード・パスのリリース: 元	リリース11.1.2.4へ
11.1.2.x	リリース 11.1.2.4 へ移行するにはメンテナンス・リリースを適用します。 **注:** Oracle Hyperion Financial Close Managementの場合、メンテナンス・リリースの適用はリリース 11.1.2.2 または 11.1.2.3 以降でのみサポートされています。 Oracle Hyperion Financial Managementの場合、メンテナンス・リリースの適用はリリース 11.1.2.1

アップグレード・パスのリリース: 元	リリース11.1.2.4へ
	、 11.1.2.2 または 11.1.2.3 以降でのみサポートされています。
11.1.1.4.x	リリース 11.1.2.3 へアップグレードしてから、メンテナンス・リリースを適用してリリース 11.1.2.4 へ移行します。
リリース 11.1.1.0.x から 11.1.1.3.x	メンテナンス・リリースを適用してリリース 11.1.1.4 へ移行し、リリース 11.1.2.3 へアップグレードしてから、メンテナンス・リリースを適用してリリース 11.1.2.4 へ移行します。

注意

Oracleはすべての Oracle Essbaseポートフォリオ製品(Essbase、Oracle Essbase Administration Services、Oracle Hyperion Provider ServicesおよびEssbase Studio)およびコンポーネント(サーバー、クライアント、ランタイム・クライアント、APIおよびJAPI)の同じバージョンを使用することをお薦めします。

このリリースで修正された問題

このセクションには、リリース11.1.2.4.000で修正された問題が含まれています。以前のリリースで修正された問題のリストを確認するには、Defects Fixed Finderを使用します。このツールでは、所有する製品および現在の実装のリリースを確認できます。1回のクリックで、修正された問題の説明とそれに関連するプラットフォームおよびパッチ番号を含むカスタマイズされたレポートが、ツールによってすばやく生成されます。このツールはこちらにあります:

https://support.oracle.com/oip/faces/secure/km/DocumentDisplay.jspx?id=1292603.1

- 18084958 -- 接続ウィザードで、マテリアライズド問合せ表(MQTables)を含むDB2データ・ソースの接続プロパティを入力して「次」をクリックした場合、MQTablesが表示されません。

注:

この修正にはDataDirect JDBCドライバをバージョン5.1に更新する必要があります。詳細はOracleサポートに連絡してください。

- 17596834 -- 「サンプル・データの表示」を選択すると、null値が存在する場合にプレビュー・データが表示されません。
- 13356961 -- 「ディメンション要素のフルパスを表示」オプションがデフォルトで表示されません。
- 17263513 --**可変属性**ダイアログ・ボックスで「**独立ディメンション設定**」を設定しようとすると、「**タイプ**」が「**個別**」で「**開始**」が記入されていても「**OK**」ボタンがグレー表示されます。
- 19630395 -- “currency”という名前のディメンションの階層を作成すると`階層エラー。CurrencyはEssbase命名標準に準拠していません。有効なEssbase名を入力してください。`というエラー・メッセージが返されます。
- 20243329 -- 「勘定科目」ディメンション・メンバーが「**ラベルのみ**」に設定され、その子に関する集計が**無視**に設定された場合、Essbase Studioによって集約ストレージ・アプリケーション・モデルに対する検証エラーが誤って発生しました。
- 19850301 -- テンプレート変数を含むユーザー定義SQLを使用したドリルスルーが、インポート/エクスポート後に無効になります。

既知の問題

このリリースで注意が必要な既知の問題は次のとおりです。

- 12815260 --

  ディメンション要素にソート順が適用されており、Essbaseモデルでそのディメンション要素に基づいたメンバーに接頭辞または接尾辞の変換が適用されている場合、そのメンバーはモデルのデプロイ後に正しくソートされません。

  回避策: 基礎となるディメンション要素にソート順が適用されているメンバーに接頭辞または接尾辞の変換が必要な場合は、変換を追加する要素のキー・バインディング式を編集します。この場合、Essbaseモデルでは変換機能を使用しないでください。

  たとえば、TBCデータベースを使用し、次の階層を使用して製品ディメンションを構築します:

  ```
          FAMILY
  |_ SKU
  ```

  キー・バインディング式に変換を適用する前に、ディメンション要素プロパティを次のように設定します:
  - ディメンション要素FAMILY - キー・バインディングとキャプション・バインディングをPRODUCTDIM.FAMILYに設定し、列のソートをPRODUCTDIM.FAMILYに設定
  - ディメンション要素SKU - キー・バインディングとキャプション・バインディングをPRODUCTDIM.SKUに設定し、列のソートをPRODUCTDIM.SKUに設定

  ここで、連結を使用してキー・バインディング式を編集し、接頭辞または接尾辞を追加します。

  たとえば、PRODUCTDIM表のSKUを接尾辞としてFAMILYディメンション要素に追加するには、下の太字のテキストをキー・バインディング式に追加します:

```
            connection : \'TBC-oracle'::'TBC.PRODUCTDIM'.'FAMILY'
            || "_" || connection : \'TBC-oracle'::'TBC.PRODUCTDIM'.'SKU'
```

- 16921268 -- カスタム・ポートにインストールするとEssbase Studioサーバーをシャットダウンできません。回避策は、`Dserver.url=Essbase Studio Server machine:custom port number`を追加して`stopServer.sh`を変更することです。たとえば次のエントリを変更します。変更前:

```
            "${JAVA_HOME}/bin/java" -Xms128m -Xmx768m $JAVA_OPTIONS -cp
"${EPM_ORACLE_HOME}/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/server.jar"
com.hyperion.cp.api.ShutdownRequest
```

  変更後:

```
"${JAVA_HOME}/bin/java" -Xms128m -Xmx768m -Dserver.url=
            Essbase Studio Server machine
            :
            custom port number
             $JAVA_OPTIONS -cp
"${EPM_ORACLE_HOME}/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/server.jar"
com.hyperion.cp.api.ShutdownRequest
```

- 16298982--Essbaseが日本語Linuxで実行中の場合、ネイティブの日本語アプリケーションでアウトラインへの日本語文字のロードが非ストリーミング・モードで機能しません。**回避策**: かわりにストリーミング・モードを使用します。
- 16423924--週要素が「**日付要素の作成**」ダイアログ・ボックスから欠落しています。使用可能なオプションは、年、四半期、月および曜日です。**回避策:** 次の構文を使用して「キャプション・バインディング」および「キー・バインディング」フィールドにディメンション要素を手動で作成します。「キー・バインディング」には「拡張」を選択してください。

  月の週を表すには:

```
'WM'( connection : \'tbc'::'TBC.SALES'.'TRANSDATE' ) . toString
'WM'( connection : \'tbc'::'TBC.SALES'.'TRANSDATE' )
```

  年の週を表すには:

```
            'WY'( connection : \'tbc'::'TBC.SALES'.'TRANSDATE' ) . toString
'WY'( connection : \'tbc'::'TBC.SALES'.'TRANSDATE' )
```

  詳細は、*Oracle Essbase Studio*ユーザーズ・ガイドのディメンション要素の基となる式の作成に関する項を参照してください。
- 16435266 -- 親/子列が含まれる場合、単一のテキスト・ファイルを使用して2つ以上の自己結合を作成すると失敗します。

- 16517700 -- `server.query.skipValidation=true`が`server.properties`に設定されている場合、ドリルスルー・レポートのユーザー定義SQLの検証が正しく機能しません。無効なユーザー定義SQL文の検証で、「ユーザー定義SQLは有効です」が誤って返されます。
- 16522882 -- 11.1.2.2.000から11.1.2.3.000へのアップグレード後、データベース・ソースの追加または再初期化コマンドの発行でJDBCドライバ・エラー・メッセージが表示される場合があります。**回避策**: JDBCドライバ・エラー・メッセージが表示された場合、Essbase Studioサーバーを再起動します。
- 16292007 -- Oracle RACがデータ・ソースの場合、ODBC接続文字列を使用した非ストリーミング・モードでのキューブ・デプロイメントはサポートされません。
- 14625545 -- ディメンション要素が遅延キー・バインディングを使用して作成され、さらにそれらの要素が重複メンバー名サポートが有効なEssbaseモデルで使用された場合、キューブ・デプロイメントが失敗します。**回避策:** ディメンション要素で、「拡張」オプションを使用して手動で「キー・バインディング」を編集します。たとえば、TBCデータベースを使用し、UDAMKTSIZE列から作成されたディメンション要素に対して自動的に表示される遅延キー・バインディングは次のとおりです:

```
            class : \'tbc'\'REGION'\'REGION'.'caption' || "_" || class :
 \'tbc'\'MARKET'\'UDAMKTSIZE'.'caption'

Instead, edit the key binding in the dimension element by using the Advanced option as
 follows:

connection : \'tbc'::'TBC.REGION'.'REGION'||connection :
 \'tbc'::'TBC.MARKET'.'UDAMKTSIZE'
```

- N/A -- Integration Servicesカタログの移行は、64ビットUNIXプラットフォームまたはWindows 2008 64ビット・プラットフォームではサポートされていません。
- N/A -- Essbaseモデルで定義された変換ルールは、ドリルスルー操作の問合せ生成では使用されません。

  回避策: ディメンション要素のキャプション・バインディングの式を編集してメンバーを変換できます。
- N/A -- カタログ・データベースがOracleである場合: カタログ・データベースに接続する際に、Essbase StudioでALTER SYSTEMコマンドが発行されなくなりました。パフォーマンスを向上させるため、Essbase Studioカタログ・ユーザーのOracleデータベース・ユーザー権限にALTER SYSTEM文を追加してください。

  推奨の設定は次のとおりです:

```
            ALTER SYSTEM SET open_cursors=300 SCOPE=MEMORY
```

  このカタログ・ユーザーは、構成時にOracle Hyperion Shared Services Registryに指定されるもので、ALTER SYSTEM文の実行に必要な権限を持っている必要があります。
- 6576813 -- Windows Vistaでは、JISX0208およびJISX0212日本語文字セットにかわるJISX0213日本語文字セットがサポートされています。Essbaseファミリの製品では、JISX0213日本語文字セットはサポートされません。
- 7138321 -- Oracle Business Intelligence Enterprise Editionデータ・ソースに基づいたXOLAP対応のEssbaseモデルをデプロイできません。
- 7366645 -- Smart ViewまたはOracle Essbase Spreadsheet Add-inを使用して、Essbase Studioで構築されたキューブの問合せを実行する際、ドリルスルー・セルの交差が基本メンバーと1つ以上の関連付けられた属性メンバーの両方で表されている場合は、そのセルのドリルスルーを実行できません。

  具体的には、基本ディメンションのメンバーと属性ディメンションのメンバーによって表される交差(セル)に対してはドリルスルーが機能しません。

Essbase Studioでドリルスルー・レポートに交差を指定する際は、マルチチェーン階層内の基本階層と属性階層の両方を指定しないでください。ドリルスルーにはいずれかの階層のみを選択してください。

基本メンバーと属性メンバーを含む交差からドリルスルーを行う必要がある場合は、Oracle Essbase Integration Servicesを使用してキューブを構築する必要があります。

- 8661977 -- キューブを初めてデプロイする際に、そのキューブにテキスト・メジャーまたは日付メジャーが含まれている場合、データは正しくロードされます。そのキューブの後続のデプロイメントでは、「既存データに追加」または「既存データから削除」オプションのいずれかとともに「データのロード」オプションを選択すると、データは正しくなくなります。

  回避策: テキスト・メジャーまたは日付メジャーを除外し、数値メジャーについてのみデータを選択的にロードするには、カスタム・データ・ロードSQLを使用します。

- 8897922 -- OLAPメタアウトラインをIntegration ServicesからEssbase Studioに移行する際、元のOracle Essbase Integration Servicesのメンバー・セットに変換ルールとソート・ルールの両方が定義されていると、デプロイされたEssbaseキューブで階層内のメンバーが適切にソートされません。Essbase Studioでは、Essbaseモデル・プロパティで変換を実行しても問題は解決されません。

  回避策: ディメンション要素のキー・バインディング式を編集することで、ディメンション要素プロパティ・ダイアログ・ボックスで変換を実行します。

- 8908738、7127257 -- Microsoft Windows認証は、Microsoft SQL Serverへのデータ・ソース接続に対してはサポートされません。
- 9315569 -- 「ラベリング・ルールの編集」ダイアログ・ボックスにリストされるラベリング・ルールは翻訳されておらず、すべての言語に対して英語で表示されます。

  「ラベリング・ルールの編集」ダイアログ・ボックスは、「カレンダ階層」ダイアログ・ボックスの「時間レベル」領域からアクセスします。このアクセス方法は、*Oracle Essbase Studio*ユーザーズ・ガイドの時間レベルの定義に関する項に記載されています。

- 9325297 -- 可変属性は、履歴表のFROM列またはTO列のNULL値をサポートしません。可変属性を使用する場合、履歴表にFROM列またはTO列がNULL値である行が含まれていると、その行の属性値は属性ディメンションに組み込まれません。

  回避策: 履歴表のFROM列またはTO列にNULL値がないことを確認してください。履歴表の詳細は、*Oracle Essbase Studio*ユーザーズ・ガイドの可変属性の履歴表の設定に関する項を参照してください。

- 9326364 -- 2つの独立ディメンションで1つの可変属性に対して同じリーフ・メンバー名がある場合、問合せ内のフィールド名が重複するというエラーによりデプロイメントは失敗します。

  たとえば、可変属性ディメンションVARYPERと、2つの独立ディメンションPeriodおよびYearがあるとします。Essbaseモデル・プロパティの「独立ディメンション・バインディング」ダイアログ・ボックスでPeriodとYearのリーフ・メンバー名が同じ場合、デプロイメントは失敗します。

  回避策: リーフ・メンバー名に使用される物理リレーショナル表の列名を変更します。これが不可能な場合、別の列名でユーザー定義表を作成し、このユーザー定義表の列に基づく2番目の独立ディメンションを構築できます。

- 9364712 -- キューブを非ストリーミング・モードでデプロイする(**「キューブ・デプロイメントでストリーミング・モードを有効化」**チェック・ボックスをクリアする)場合、EssbaseモデルがUnicodeデータ・ソースに基づいていると、デプロイに失敗します。

  回避策:

  - ストリーミング・モードを使用します: **キューブ・デプロイメント・ウィザード**で、**「キューブ・デプロイメントでストリーミング・モードを有効化」**チェック・ボックスが選択されていることを確認します。
  - N-CHARサポートが有効になっているデータ・ソースに対しては非ストリーミング・モードを使用します:

まず、次の方法でDSNを作成し、N-CHARサポート・オプションを有効にします:

- Windowsの場合、**ODBCデータ ソース アドミニストレータ**を使用し、**N-CHARサポートを有効にする**オプションを選択してDSNを作成します。このオプションは、**ODBCドライバ設定**ダイアログ・ボックスの**詳細**タブにあります。
- UNIXまたはLinuxの場合、`odbc.ini`ファイルを編集して新しいDSNを作成し、EnableNcharSupportの値を次のように設定します:

```
EnableNcharSupport=1
```

次に、**キューブ・デプロイメント・ウィザード**で次の手順を実行します:

1. 「**Essbaseサーバー接続オプション**」ページで、「**ODBC (ODBC DSN名を入力)**」オプションを選択し、作成したDSNを指定します。
2. 「**キューブ・デプロイメント・オプション**」ページで、「**キューブ・デプロイメントでストリーミング・モードを有効化**」チェック・ボックスがクリアされていることを確認します。

「**キューブ・デプロイメントでストリーミング・モードを有効化**」チェック・ボックスの使用方法については、*Oracle Essbase Studio*ユーザーズ・ガイドのキューブ・デプロイメントを参照してください。

- 9433391 -- テキスト・ファイルのデータ・ソースからのデプロイ
  - テキスト・ファイル・データ・ソースからのキューブ・デプロイメントが常に非ストリーミング・モードで実行されます。

    Essbase Studioサーバーでは、テキスト・ファイルのデータ・ソースについては自動的に非ストリーミング・キューブ構築メソッドが使用されます; このため、ユーザーはこの内部ロード・メソッドについての指定を求められることや、通知を受信することはありません。
  - キューブ・デプロイメントの進捗状況統計はテキスト・ファイルのデータ・ソースではサポートされません。
- 9477466 -- Smart Viewで、Essbase StudioソースのキューブからOracle Hyperion Financial Data Quality Managementへのドリルスルーを実行する際に、関係するすべての製品(Workspace、Oracle Hyperion Provider Services、Essbase、Essbase Studio、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management)のセッションが期限切れになる前にEPM Systemのシングル・サインオン・トークンが失効すると、次のメッセージが表示されます: エラー: シングル・サインオンを使用するシステムへのログオン中にエラーが発生しました。管理者に問い合せてください。エラー: 2067 - アプリケーションへのアクセス権がありません!

  回避策: Oracle Smart View for OfficeクライアントからWorkspaceに再度ログインします。
- 9492526、9502269 -- キューブ・デプロイメント・ウィザードで「ODBC (EssbaseはODBC接続文字列を動的に作成)」オプションを選択した場合、WindowsでOPMNを使用して**Essbase**を起動すると、**Oracle BI EE**データ・ソースから構築したキューブのキューブ・デプロイメントが失敗します。

  回避策: デプロイメントを成功させるには、次のいずれかの回避策を取ります:
  - **キューブ・デプロイメント・ウィザード**で、OBIデータ・ソース接続に対してODBC DSNを指定します。詳細は、*Oracle Essbase Studio*ユーザーズ・ガイドのキューブ・デプロイメントの接続情報の指定に関する項を参照してください。
  - キューブ・デプロイメント・ウィザードで「キューブ・デプロイメントでストリーミング・モードを有効化」オプションを選択してストリーミング・モードでEssbase Studioサーバーを起動し、デプロイメントを実行します。
- 9561925 -- **Solarisのみ:** Essbase Studioサーバーの起動が失敗し、次のいずれかのメッセージがサーバー・ログ・ファイルに表示された場合、ユーザーのコンピュータのネットワーク構成に問題がある可能性があります:
  - カタログにサーバーを登録できません。
  - ネットワーク・エラーのため、サーバー登録の確認ができませんでした。

  回避策: Essbase Studioカタログ・データベースの`cp_server_key`表に空の行を1つ手動で追加します。

- 11663358 -- 日付属性のあるカレンダ階層を含むキューブは、大部分の日付属性が欠落しているため、キューブ・デプロイメント中に正しく作成されません。(不具合11696797に関連。)
- 11696797 -- カレンダ階層の日付属性は、「**Essbaseモデル・プロパティ**」ダイアログ・ボックスの階層の下に一部のみが表示されます。(不具合11663358に関連。)
- 13810033 -- Essbase StudioはMicrosoft WindowsプラットフォームでIPv6プロトコルをサポートしていません。Essbase StudioがIPv6プロトコルをサポートしているのはUNIXプラットフォームのみです。
- 14155099, 14462547 -- Essbase Studioの**Netezzaデータ・ソース**Essbase Studioで非ストリーミング・モードを使用してNetezzaデータ・ソースに接続できません。

  回避策: 非ストリーミング・モードでは、データ・ソースへの接続はEssbaseにより行われ、Essbase Studioでは行われません。データ・ソース・ドライバはEssbase構成ファイル(`essbase.cfg`)に指定されています。デフォルトで、一部のデータ・ソース・ドライバはデータ・ソース・エントリの先頭にセミコロン(;)のコメント・インジケータがあると無効化されます。次の例ではNetezzaドライバが無効化されています。

```
            BPM_Oracle_DriverDescriptor "DataDirect 6.1 Oracle Wire Protocol"
BPM_DB2_DriverDescriptor "DataDirect 6.1 DB2 Wire Protocol"
BPM_SQLServer_DriverDescriptor "DataDirect 6.1 SQL Server Native Wire Protocol"
;BPM_SQLServer_DriverDescriptor "SQL Server"
;BPM_Netezza_DriverDescriptor "NetezzaSQL"
BPM_Teradata_DriverDescriptor "Teradata"
;BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server 11g_OHXXXX"
;BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server"
BPM_MySQL_DriverDescriptor "DataDirect 6.1 MySQL Wire Protocol
```

  `essbase.cfg`を編集して、使用するデータ・ソースがリストされていることと、セミコロンのコメント・インジケータにより無効化されていないことを確認してください。

注:

Netezza ODBCドライバはEssbaseサーバーが実行するマシンにインストールされている必要があります。

ヒントとトラブルシューティング

制限とガイドライン

Oracle Essbase Studioユーザーズ・ガイド(PDFおよびHTMLフォーマット)には、Essbase Studioでの作業時に生じる可能性のある様々な制限事項について説明した、Essbase Studioの制限事項とガイドラインに関する付録が含まれています。

このドキュメントの 11ページの仮想メモリー設定の処理も参照してください。

Essbase Studioクライアント・インストーラの言語の選択

Essbase Studioクライアント・インストーラでは言語を選択できますが、選択した言語とシステム・ロケールが一致しない場合、Essbase StudioのUIはシステム・ロケールの言語と一致し、インストーラで選択した言語とは一致しません。たとえば、インストーラを起動し、「英語」ロケールを持つシステム上で「日本語」言語を選択した場合、インストーラは日本語で表示され、Essbase Studioは正常にインストールされます。Essbase Studioを起動すると、UIは英語で表示されます。

カタログURLプロパティの構文の確認

Essbase Studioサーバーが起動に失敗した場合、Shared Servicesレジストリ・ファイルの`catalog.url`プロパティをチェックして構文が正しいことを確認します。

構文が正しくない場合、Essbase Studioサーバーは起動しません。構文が正しくない場合、`server.properties`ファイルまたはShared Servicesレジストリ内の`catalog.url`プロパティを更新して問題を修正します。その後、Essbase Studioサーバーを再起動してください。

注意:

- 詳細および例については、*Oracle Essbase Studioユーザーズ・ガイド*のcatalog.urlに関する項を参照してください。
- `server.properties`の設定はShared Servicesレジストリの設定をオーバーライドします。
- Oracle Hyperion Shared Services Registryの設定を表示または変更するには、*『Oracle Enterprise Performance Management System配置オプション・ガイド』*に説明されている`epmsys_registry`ユーティリティを使用します。

「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用した場合のreinitコマンドの実行

「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用してEssbase Studioリリース11.1.2、11.1.2.1または11.1.2.2をこのリリースに移行した場合、インストールおよび構成後にEssbase Studioカタログを更新する必要があります。カタログを更新するには、Essbase Studioコマンド・ライン・クライアントで`reinit`コマンドを発行します。詳細は、*『Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド』*のEssbase Studioカタログの更新に関する項を参照してください。

XOLAPキューブのEssbase Studioサーバーで生成されたMaxLについて

(11058371、11068896)

キューブ・デプロイメント・ウィザードでオプションを選択し、選択内容をMaxLスクリプトとして保存することで、MaxLのdeploy文を生成できます。

XOLAPキューブを再デプロイする際、Essbase Studioサーバーで生成されたMaxLを編集してデプロイメント設定を除去または変更すると、データに一貫性がなくなる可能性があります。

XOLAPキューブを再デプロイするために、Essbase Studioサーバーで生成されたMaxLスクリプトを編集してデプロイメント設定を変更しないでください。かわりに、**キューブ・デプロイメント・ウィザード**を起動して必要な選択を行い、その選択内容を新しいMaxLスクリプトに保存することをお薦めします。

Essbase Studioルール・ファイルでのMaxLのImport Dimensions文の使用

(7216055, 9034403)

Essbase Studioで作成したルール・ファイルから、MaxLのDeploy文を使用してEssbaseにメンバーやデータをロードできます。このタスクはDeploy文を使用すると最も簡単に実行できます。

ただし、MaxLのImport Dimensions文を使用してEssbase Studioで生成されたルール・ファイルからメンバーをロードすることも可能です。Import Dimensions文を使用してアウトラインを構築する場合は、ファクト表またはユーザー定義メンバーのみが含まれる階層からの勘定科目ディメンションの構築に問題があることに注意してください。このような場合は、データを正常にロードするために次の回避策を使用します。

回避策: MaxLのImport Dimensions文で呼び出せる、空のダミー・テキスト・ファイルを用意します。例:

```
     import database 'tbc.MaxL1' dimension from local text data_file 'C:\dummy.txt' using
server rules_file 'Account' on error append to 'C:\Hyperion\textUn1.log';
```

仮想メモリー設定の処理

(9460997, 9480016, 10415849)

Essbase Studioコンソールを実行しているマシンでは、オペレーティング・システムで指定されている範囲で仮想メモリー設定を大きくすることができます。

たとえば、Windows 32ビット・プラットフォームでは、最大仮想メモリー設定は2048MBです。

仮想メモリー構成の説明は、*Oracle Essbase Studioユーザーズ・ガイド*の仮想メモリーの構成に関する項に記載されています。

Oracle BI EEデータ・ソースに基づいたキューブのデプロイ

(9492623, 10391499)

11ページの表2には、Oracle EssbaseがOPMNによって管理されていると仮定した場合に、ストリーミング・モードまたは非ストリーミング・モードで実行されているEssbase StudioサーバーがOracle BI EEサーバーとどのように統合されるか、および特定のオペレーティング・システムでストリーミング・モードまたは非ストリーミング・モードがサポートされているかどうかがまとめられています。また、さらに構成が必要な場合には、12ページのステップ 2の該当するサブ手順も示されています; 12ページのステップ 2.aや 12ページのステップ 2.bがそれに当たります。

表2 Essbase StudioサーバーとOracle BI EEサーバーとの統合

Oracle BI EEのバージョン	非ストリーミング・モード server.essbase.streamingCubeBuilding=false	ストリーミング・モード server.essbase.streamingCubeBuilding=true
11.1.1.5以降	**Windows:** サポートされています `essbase.cfg`ファイルを変更してください。12ページのステップ 2.bを参照してください。	**Windows:** サポートされています **UNIXおよびLinux:** サポートされています

Oracle BI EEのバージョン	非ストリーミング・モード server.essbase.streamingCubeBuilding=false	ストリーミング・モード server.essbase.streamingCubeBuilding=true
	UNIXおよび**Linux:** サポートされていません Oracle BI EE ODBCドライバには、ORACLE_HOMEなどの共通の環境変数に競合があります。	13ページのステップ 2.cを参照してください。
10.1.3.4以降	**Windows:** サポートされています Oracle BI EE 11.1.1.5 ODBCドライバがEssbaseサーバーと同じマシンにインストールされている必要があります。12ページのステップ 2.aを参照してください。 **UNIX**および**Linux:** サポートされています `opmn.xml`を手動で変更し、11.1.1.3とは異なる適切な環境変数を設定してください。13ページのステップ 2.dを参照してください。	**Windows:** サポートされています **UNIX**および**Linux:** サポートされています
10.1.3.3以前	**Windows:** サポートされていません **UNIX**および**Linux:** サポートされていません	**Windows:** サポートされています 13ページのステップ 2.eを参照してください。 **UNIX**および**Linux:** サポートされています 13ページのステップ 2.eを参照してください。

➤ ページの表2で必要とされている追加の構成を実行するには、次の手順に従います:

1. Windowsの場合、非ストリーミング・モード(Essbase Studioコンソールでキューブ・デプロイメント・ウィザードの「Essbaseサーバー接続オプション」ダイアログで「キューブ・デプロイメントでストリーミング・モードを有効化」を選択します。)Oracle BI EE ODBCドライバがバージョン11.1.1.5で、Essbaseサーバーと同じマシンに存在している場合、Essbase Studioはバージョン10.1.3.4.1以降のOracle BI EEデータ・ソースからキューブをデプロイできます。
2. 前出の表に記載されているように、使用しているオペレーティング・システム、Oracle BI EEのバージョン、およびEssbase Studioサーバーをストリーミング・モードで実行するか非ストリーミング・モードで実行するかに応じて、次の手順を実行します:

   a. セミコロンを除去して、`;BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server 11g_OHXXXX"`の行のコメント指定を解除します:

   ```
   BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server 11g_OHXXXX"
   ```

   b. `11g_OHXXXX`を、**ODBCデータ ソース アドミニストレータ**の「**ドライバ**」タブに表示されるものと同じインスタンス番号に変更します; 次に例を示します:

```
                    BPM_ORACLEBI_DriverDescriptor "Oracle BI Server 11g_OH449923612"
```

c. UNIXおよびLinuxの場合、Oracle BI EEバージョン11.1.1.5以降に基づいてキューブをデプロイする場合は、ストリーミング・モードを使用する必要があります。

d. UNIXおよびLinuxで、非ストリーミング・モードでOracle BI EEバージョン10.1.3.4のデータ・ソースに基づいてキューブをデプロイする場合、次の環境変数を`opmn.xml`ファイルに追加する必要があります:

```
                    <variable append="true" id="LD_LIBRARY_PATH"
   value="/.../prod1/OracleBI/server/Bin"/>true
             id="LD_LIBRARY_PATH"
   value="/.../prod1/OracleBI/web/Bin"/>
<variable id="SATEMPDIR" value="/.../prod1/OracleBIData/tmp"/>
<variable id="SAROOTDIR" value="/.../prod1/OracleBI"/>
<variable id="SA_ROOTDIR" value="/.../prod1/OracleBI"/>
variable id="SADATADIR" value="/.../prod1/OracleBIData"/
```

詳細は、『*Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』のEssbaseとOracle BI EEの統合のための環境構成(UNIX)に関する項を参照してください。

e. Windows、UNIXおよびLinuxでOracle BI EEバージョン10.1.3.3に基づいてキューブをデプロイできるのは、ストリーミング・モードが有効化されている場合のみです。

3. UNIXで実行されているOracle Business Intelligence Enterprise EditionのODBCドライバ構成については、『*Oracle Enterprise Performance Management Systemインストールおよび構成ガイド*』のEssbaseとOracle BI EEの統合のための環境構成(UNIX)に関する項で説明されています。

アップグレード中に発生するカタログ内の整合性のないオブジェクトに関するエラー

(11073948)

リリース11.1.1.3からのアップグレードで、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemコンフィグレータを使用して構成している際、Essbase Studioに対するデータベースの構成タスクが失敗した場合は、次に示すような、カタログ内の整合性のないオブジェクトに関連するメッセージがあるかどうか、アップグレード・ログ・ファイルを確認してください:

```
     Caused by: com.hyperion.cp.cplutil.scripts.export_import.exceptions.ExportException:
Inconsistent object in catalog. Please check the object form : \'Drill Through
Reports'\'Supplier', object id : @44#0#101#0@.
```

重要: 11.1.1.3リリース環境が実行されていて、Essbase Studioカタログが正常にアップグレードされるまで使用可能であることを確認してください。

このエラーは、ドリルスルー・レポートが依存しているデータ・ソース接続の名前を変更すると発生します。

ドリルスルー・レポート内の整合性のないオブジェクトに関連するエラーがある場合は、1つ以上のドリルスルー・レポートが無効であるため、Essbase Studioをアップグレードする前に修正する必要があります。次のいずれかのアクションを実行して、整合性のないドリルスルー・レポート(名前が変更されたデータ・ソース接続に依存しているドリルスルー・レポート)を修正してください:

- 11.1.1.3環境で、データ・ソース接続を元の名前に変更します。

- ドリルスルー・レポート・エディタの「**レポート・コンテンツ**」タブで、新しい列値と、オプションでフィルタを指定して無効なドリルスルー・レポートを更新します。
- 11.1.1.3環境から無効なドリルスルー・レポートを削除し、必要な場合は、アップグレードしたEssbase Studio環境に再作成します。

次に、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemコンフィグレータを再起動して、「データベースの構成」タスクを再実行します。

Windows認証を使用してEssbase Studioサーバーを起動

(13562254)

Essbase StudioサーバーがWindowsサービスとしてインストールおよび構成されている場合、Windows認証を使用して、Essbase Studioサーバーをサービスとして起動することはできません。Windows認証を利用するようにEssbase Studioサーバーを構成するには、次の手順を実行する必要があります:

1. Essbase Studioサーバー・サービスがすでに実行されている場合は停止します。
2. `catalog.username`プロパティを、次のとおり`server.properties`ファイルに追加します:

   ```
   catalog.username=
   ```

   `catalog.username`プロパティにユーザー名やその他のテキストを追加しないでください。
3. 「スタート」メニューまたは`start_BPMS_bpms<instance>_Server.bat`ファイルを使用してEssbase Studioサーバーを起動します。

Oracle Advanced Security

Essbase StudioでOracleデータベースを使用している場合は、Oracle Advanced Securityを使用して関連するOracle JDBCドライバを構成することをお薦めします。Oracle Advanced Securityについては、次のリンクをクリックしてください:

http://download.oracle.com/docs/cd/B19306_01/network.102/b14268/asojbdc.htm#i1006717

ドキュメントの更新事項

サブトピック

- EPM System製品ドキュメントへのアクセス
- Internet Explorerのオンライン・ヘルプ
- PDFからのコード・スニペットのコピーと貼付け
- ドキュメント・フィードバック
- アクセシビリティの考慮事項
- プライベート・シノニムのみ表示されます
- 複数のデータ・ソースからミニスキーマを移入できません
- 検索ルールを作成して別名を変更およびリフォーマットする方法
- これまで文書化されていなかったユーザー役割cpDMDSAdmin

EPM System製品ドキュメントへのアクセス

最新のEPM System製品ガイドは、Oracle Help Center (https://docs.oracle.com/en/)で入手します。ドキュメントにアクセスして表示またはダウンロードするには、「Applications」アイコンをクリックします。「Applications Documentation」ウィンドウで「EPM」タブを選択してから、「Enterprise Performance Management」リンクをクリックします。

また、Oracle Technology Network (http://www.oracle.com/technetwork/index.html)およびOracle Software Delivery CloudのWebサイト(http://edelivery.oracle.com/EPD/WelcomePage/get_form)で、デプロイメント関連ドキュメントを参照できます。またはEPM System Documentation Portal (http://www.oracle.com/us/solutions/ent-performance-bi/technical-information-147174.html)にアクセスすることもできます。そこで、My Oracle Support、EPM Supported Platform Matricesなどへのリンクが見つかります。

Internet Explorerのオンライン・ヘルプ

Internet Explorer 9を使用している場合、一部の表およびテキストはオンラインヘルプで正しく表示されない場合があります。

PDFからのコード・スニペットのコピーと貼付け

PDFファイルからコード・スニペットを切り取って貼り付ける際、貼付け操作時に一部の文字が失われる場合があり、これによりコード・スニペットが無効になります。回避策: コード・スニペットをHTMLバージョンのドキュメントから切り取って貼り付けます。

ドキュメント・フィードバック

次の電子メール・アドレスに製品ドキュメントのフィードバックを送信してください:

EPMdoc_ww@oracle.com

次のソーシャル・メディア・サイトのEPM情報開発をフォローしてください:

- YouTube - http://www.youtube.com/user/OracleEPMWebcasts
- Google+ - https://plus.google.com/106915048672979407731
- Twitter - https://twitter.com/HyperionEPMInfo
- Facebook - https://www.facebook.com/pages/Hyperion-EPM-Info/102682103112642
- Linked In - http://www.linkedin.com/groups?home=&gid=3127051&trk=anet_ug_hm

アクセシビリティの考慮事項

オラクル社では、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントをご利用いただけることを目標としています。製品のアクセシビリティ・ガイドに説明されている、EPM System製品サポート・アクセシビリティ機能。このガイドの最新版は、Oracle Technology NetworkのOracle Enterprise Performance Management Systemのドキュメント・ライブラリ(http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html)にあります。

また、このReadmeファイルはHTML形式でも表示できます。

プライベート・シノニムのみ表示されます

(20224624)

接続ウィザードの「表の選択」ページで「シノニムの表示」を選択すると、プライベート・シノニムのみが表示されます。パブリック・シノニムは表示されません。この情報は英語バージョンのRelease 11.1.2.4 *Oracle Essbase Studio User's Guide*にはありますが、翻訳されたリリース11.1.2.4 *Oracle Essbase Studio*ユーザーズ・ガイドにはありません。

複数のデータ・ソースからミニスキーマを移入できません

(20174855)

*Oracle Essbase Studio*ユーザーズ・ガイドのデータ・ソース接続、リレーショナル・ソースへのミニスキーマの移入に関する項の手順5では、複数のデータ・ソースからミニスキーマを移入できると説明されていました。これは正確な文ではありません。この手順は英語バージョンの11.1.2.4 *Oracle Essbase Studio User's Guide*から削除されていますが、翻訳された11.1.2.4リリースのガイドには残っています。

検索ルールを作成して別名を変更およびリフォーマットする方法

(18177023)

ユーザー・インタフェースを正確に反映するために、*Oracle Essbase Studio*ユーザーズ・ガイドの、検索ルールを作成して別名を変更およびリフォーマットする方法に関する項を更新しました。手順7で、"true"のインスタンスが"yes"で置き換えられました。この修正は英語バージョンの11.1.2.4 *Oracle Essbase Studio User's Guide*に対して行われましたが、翻訳された11.1.2.4リリースのガイドには不正なテキストが残っています。

これまで文書化されていなかったユーザー役割cpDMDSAdmin

(11724835)

Essbase Studioのユーザー役割cpDMDSAdminは、これまで文書化されていませんでした。この役割には、Essbase Studioビューア、データ・ソース管理者およびメタデータ管理者の役割のすべての権限があります。cpDMDSAdmin役割名は、プロビジョニング時にデータ・ソース管理者およびメタデータ管理者の役割の両方が選択されたときにEssbase Studioコンソールのタイトル・バーに表示されます。

プロビジョニングおよびすべてのOracle Essbase Studioの役割の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System*ユーザー・セキュリティ管理ガイドを参照してください。

著作権情報

Oracle® Essbase Studio Readme,

Copyright © 2015, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations.As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs.No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクルおよびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel、Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。